

# 香り

理事長 永井 俊彦



春となり、街には草花や木々の香りが漂う季節となりました。"におい"に関する漢字には"臭"・"匂"・"香"という字がありますが、"臭"・"匂"は良い・悪い・嫌な匂いにも使われますが"香"の字は良い"におい"にだけ使われます。西洋には"香水"という香りの文化がありますが、日本にも"香(こう)"という香りの文化があります。

お香は仏教と共に伝来(552年?、538年)しました。というのも仏教では香を焚くことで心身を清めるとされ、香は切り離すことのできないものとなっています。また、660年唐から道昭により持ち帰られた経典"阿毘達磨俱舍論"に「仏様(死者)の食べ物は香りである」と書かれています。その教えにより、死後四十九日間香りを食べる(食香)ために香を絶やさず、焼香を行う慣わしになったそうです。

香が仏教から分かれ、"香りを楽しむ文化"として発達するのは唐の僧鑑真が754年に渡来し、沈香・慶香・甘松香・安息香・甲香などの生薬の調合(合わせ香)を伝えたことに始まり、平安時代になると貴族の間で練香(合わせ香に蜂蜜、炭粉などを加え固めたもの)などの薫物(たきもの)が発達し、衣に香りを焚き染める薫衣香(くのえこう)が流行りました。代表的なものに六種(むくさ)の薫物:梅花(春)、荷葉(夏)、侍従(秋)、菊花(秋)、落葉(冬)、黒方(冬)があり、家伝の調合法が伝わっています。これらは今でも季節に合わせお茶の世界では炉や風炉で焚かれます。また、平安文学に於いても源氏物語は"香りの文学"とも言われ、"侍従"、"衣被香(えびこう)"などの名前が登場しますし、枕草子にも香りに関する記述があります。

また、焚く必要のない常温で香る白檀、龍腦、丁子、麝香などを調合した"衣被香(匂い袋)"というのがあります。現存する最古の"衣被香(匂い袋)"は正倉院に有るそうです。この"衣被香"は古くは防虫剤として衣の間などに入れられ、"匂い袋"は江戸時代には庶民の間に流行り、"花袋"、"浮世袋"と呼ばれたそうです。そして、線香は戦国~江戸初期に中国から伝えられました。

安らぎのひと時、線香を燻らせ瞑想にふけるのは如何でしょうか。